

試合に行こう！

—タタに乗って—

高橋明穂*

久しぶりの村

2024年、2度目のセネガル渡航となり、久しぶりに村入りする当日。前回の渡航から約9ヵ月たっていて、言葉を忘れてしまっていた私は、村の人々が私のことを覚えているのか、また以前と同じように迎えてくれるのか、彼らとコミュニケーションを取れるのかなどたくさん不安を抱えていた。首都ダカールから、ダカールデムディックという高速バスで村近くの地方都市まで向かい、そのあとタクシーを捕まえて村まで行く。タクシーはすんなり捕まったが、値段交渉がうまくいかず、通常の2倍の価格で村まで行くことになってしまった。乾季が始まったと思ったのに当日の朝に雨が降ったのか、村に近づくにつれ道はぬかるむ。この先の村での生活がどうなるのだろうかと思いがやられてきた。

家の前につき、タクシーから荷物を降ろしていると、ステイ先の家族や友人、近所の人たちが集まってきて、口々に

「いつ来たんだ？」

「元気だったか？」

「会いたかったよ」

「お土産はどこだ？」

など思い思いのことを話しかけてくれた。たくさんの方が入れ代わり立ち代わりで話してくれる中、小さな女の子が走って私に飛びついてきた。いつも一緒にいた妹だ！

彼女は私の手を引きながら、お父さんのところに私を連れて行った。

お父さんは私の顔を見ると

「わたしの子だ！帰ってきたね！みんな待っていたよ！」

と言って、荷物を置く場所や用意した部屋を案内してくれた。お客さんが来ていたので、お父さんはすぐに部屋から出て行ったが、それと入れ替わりに妹たちが部屋に入ってきた。彼女たちは、私の荷物を眺めたり、動かしたりしたあと、ベッドに座っておしゃべりを始めた。長旅と久しぶりの村入りで少し疲れていた私は、そのおしゃべりに少し耳を傾けながら、知っている単語を拾っては何の話をしているのか考えていた。しかし集中力が途切れてきてだんだん声も遠くなって、眠りにつこうとしていた時だった。

「アミナ、ジーンズ持っている？こういう青いやつ」

と、話しかけられた。ジーンズは持ってないけれど、青いズボンを持っていると答えると、

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

「じゃあそのズボンを着て、このユニフォームも貸すから着てね！わかったね！」
と言って、さっさとみんな部屋を出て行ってしまった。何が起きているのかよくわからないものの、言われたとおりに青いズボンと6と書いてあるサッカーユニフォームを着て、外に出る。部屋の外には、私と同じように青で着飾った10代の女の子たちが集まっていた。みんなでどこかに行くようだ。慌てて外に行く用のポシェットを用意して、みんなのもとに向かう。私が来たことに気が付いた妹がこう言った。

「ニューデムマツチュバ！」(試合に行くよ！)

試合に向かう

みんなでおしゃべりしながら、家から少し離れた日陰に行く。そこには、もうすでに8人ぐらいの若者が同じような服を着ておしゃべりをしていた。そこで話してわかったが、村の男の子たちが所属しているサッカーチームが村内の他のチームと戦うのを、隣町まで応援に行くそうだ。そのチームには、私がお世話になっている家の兄弟、村の友だちも所属している。

セネガルのサッカー熱はとてもすごい。夜には、テレビがある家や商店で子どもから大人までサッカー観戦をし、大きな声をあげながら皆で一喜一憂する。大きな大会や試合があるとWhatsAppのステータスには、応援しているチームのことや、そのチームのユニフォームに自分の名前を書き込んだものを共有して、サッカー一色になる。小学生ぐらいの男の子たちが、夕方に浜でボールを追いか

けたり、サッカーチームに所属して練習にいそしんだり、試合を家族総出で応援に行くことも珍しくない。

10分ほど待っていると、エンジンの音が近づいてきた。みんなが歓声をあげ、タタと呼ばれるマイクロバスの到着を喜ぶ。この車で試合会場まで向かう。音を聞きつけたのか、先ほどよりも多くの子どもたちが車を囲っている。1人500 cfa(約125円)を払って、急いでタタに乗り込む。一番初めに乗り込んだのは、年齢が少し上のお姉さんグループ、その次に男の子たち、明らかに乗車定員を超しているタタに、「もっと詰めて！」といって、残りの子どもたちが乗り込んだ。すし詰め状態になったタタは、私たちを乗せて試合会場へと向かう。出発してすぐ、15歳ぐらいの男の子が、ペットボトルに紙と水を入れたものを、子どもたちに向け始めた。かけられた子どもたちは、その水を体に塗り始める。何をしているのだろうと見ていると、私の順番がきた。隣に座っていた妹が笑顔でうなずく。それを合図に、彼は私にその水をかけて、体に塗るように促す。塗りながらこれは何かと聞くと、プロテージュ(保護するもの)だという。彼の話によると、相手方のチームが、マラブー(呪術師)に頼んで私たちが応援に来られないように、そして選手がうまくプレーできないようにまじないをかけたのだ。そして、こちら側のチームもそのまじないをかわすべく他のマラブーのもとに行き、そのまじないから身を守るように、そして良いことがあるようにと、この水をもらってきたのだという。タタに乗った全員が

この水を体に塗り終わると、今度は応援歌が始まった。セーので歌が始まったわけではない。誰かが手拍子を始め、それに合わせて誰かがより細かなリズムを刻む。さらにそれに乗るように誰かが歌い始め、だんだん声が大きくなり、タタが大きなスピーカーになったかのような一体感を持ち始める。みんな座って歌うだけではなく、立ち上がったたり、体を揺らしあったり、甲高い声をあげたり、窓から体を乗り出し道行く人に手を振ったり。とにかく大きな声で、全身で音を鳴らしながら試合会場へと向かった。これから始まる試合へと、応援する私たちの熱気も高まっていた。

試合が始まった

試合会場に着いて、すぐに観戦できるわけではない。まず500 cfaをまとめ役の子に渡して、入場用のチケットを購入してもらう。そのあとに、警察による持ち物検査がある。ライターや香水などの引火しそうなものや、ナイフなど危険性が高いと思われるものは取り上げられる。その検査を通り抜けると観戦席にたどり着ける。地方の10代の少年たちのサッカーの試合に警察が出動し、持ち物検査までしているのには正直驚いた。

観戦席に着くと、選手たちがウォーミングアップをしているのが見えた。目の前を青のユニフォームを着た選手が走ると歓声をあげ、緑色のユニフォームを着た相手方の選手が走るとヤジを飛ばしている。相手方の応援も同じで、彼らはジャンベという太鼓を鳴らし負けじと応援とヤジを飛ばしていた。燃え

上がる観客たちの間を、ビニール袋にジュースやヨーグルトを入れ凍らせて作ったアイスを売る人や、袋に入った冷たい水を売る人がゆっくりと歩いて行く。ずっとこの熱気が続くのかと思ったら、そうではなかった。選手たちが輪を作り、試合が始まるとわかると、みな息をのみ、じっとグラウンドを見つめた。いったん試合が始まってしまえば、タタの中と同じようにお祭り騒ぎだった。たくさん歌を歌い、踊り、選手たちのプレーに一喜一憂しながら応援した。熱い中、しかも必死に歌い踊る。私ももちろんそうだったが、試合が後半になるにつれ、座りだす子どもたちもいた。いったん座り込み、隣にいる人とおしゃべりしたり、他のことに気を取られているように見えても、試合の動向にはしっかりと気を配り、試合の重要シーンではみんなと同じように食い入るように見つめる。ゴールが決まらなくても、全力で決めようとしたことをほめたたえる。結局、私たちのチームは、2-0で勝利を収めることができた。

家に帰ろう

試合が終わり、警察や選手も帰って、観客がタタに乗って帰ろうとしていた時のことだった(写真1)。少年2人が急に殴り合いの喧嘩をし始めたのだ。その喧嘩は徐々にエスカレートし、いたるところで小さな喧嘩が勃発し始めた。あとでわかったことだが、試合の結果に怒った子どもが相手方の子どもにけんかを吹っ掛け、それが殴り合いになってしまったのだ。その喧嘩を収めようと、体の大きい青年たちが子どもたちを引き離すも、



写真1 サッカーの試合後、村へ帰るタタ（マイクローバス）を待つ子どもたち

一度火がついてしまうと、他のところに引火しやすくなかなか収まらない。その喧嘩に私の妹たちも巻き込まれ、顔をぶたれた子や、石を投げられた子もいた。帰宅後、子どもたちは試合の内容よりも、試合後の喧嘩について大人に聞かせていた。大人たちはその後3日間ほどその話題で持ちきりだった。大人たちは普段から政治や経済について、たくさん議論をしている。彼らは、子どもたちの喧嘩についても重要なこととして議論していた。村が2つの地区に分けられ、それぞれがサッ

カーチームをもつ。その2チームが競争することで、少年たちは試合後の日常においても相手地区を敵とみなす。しかしこれは、小さなひとつの村の平和、ウォロフ語でいう「ジャム」を乱しかねない。警察による身体チェックがあったことから、大人たちはこのような混乱を予想していたのだろう。村を二分したチーム構成の少年サッカーが村に占める位置をもう少し考えてみたい。

喧嘩を逃れ、無事にタタに乗って帰る途中、行きしなと同様にみんなで大きな声で勝利の歌を歌っていた。タタの運転手も、勝利のファンファーレのようにクラクションを歌に合わせてならし、村中に勝利を知らせていた。ただの少年サッカーの応援ではない。観客も選手も、真剣で全力をかけて応援する。そこにいた私が誰であるのかなど関係なく、とにかくみんな全力で応援する。帰村初日にあの歌やクラクションのファンファーレに包まれ、みんなと一緒に頑張って応援したことで、当初の不安はどこかへ吹き飛んでしまった。